

ラジオエフ防災パートナーの会

防災ラジオドラマ「富士山のふもとで暮らすということ」

登場人物

長女…さやか〈小学生〉：さちかちゃん

父…勝又鷹男：田島さん

母…勝又静子：敬子さん

おじいちゃん…夫の父親同居：ジャック先生

太田さん…市役所の防災課の人：太田さん

役員さん…いれば小林さん、いなければ亀井さん

近所の人：遠藤

モノローグ（さやか〈ゆっくりと〉）

「私は、富士山の麓のまちで生まれた。

富士山がいつも真正面に見えて、よく晴れた日は、右手に広がる宝永山の山肌や、五合目の建物までくつきり見えるから、走って頂上まで登れそうな気がする。

富士山はいつも大きくて、私たちを見守ってくれている。

そして、振り返れば、田子ノ浦の港と、駿河湾が広がっている。

私の住むまちは、海と富士山の両方に囲まれている。」

防災訓練の日

お茶の間

市役所の広報で訓練の放送がある

ゆうのすけ「今日は、避難訓練だよ。避難所に行って訓練に参加しようよ」

おじいちゃん「訓練なんてしたってしようがないらあ」

さやか「なんで？何事もなれておくことが大切だって先生もいってったよ」

おじいちゃん「まあそうだけど、富士山の噴火が起こったらここいらは溶岩で火の海だらあ、訓練したってしようがないらあどうせ死ぬんだ。」

さやか「おじいちゃんしんじやうの？私、まだ死にたくないよ」

おかあさん「おじいちゃん、さやかに変なこと吹き込まないでくださいよ、確かに富士山の噴火が起こったらうちはハザードマップ上で、避難がすぐに必要な町内なんだから、訓練は大事よ」

おとうさん「そうだよ、この前御嶽山が噴火したんだから、富士山だって、他人事じゃないんだ。噴火の前兆があったら国から情報が発表されるし、ちゃんと観測しているって言ったって、訓練も大事だよ。富士山はほかのどこよりも観測地点が多いっていう安心感はあるけどなあ。」

おじいちゃん「そんなの税金の無駄だらあ？そんな金あったら俺の年金あげてほしいわあ。なあ、さやか」

さやか「年金って言われても…。おじいちゃん、訓練行こうよ」

お母さん「おじいちゃん、そんな事言っていないで、近所の手前もあるからとりあえず顔を出して下さいよ。」

おじいちゃん「わかったよお〜とりあえず行くかあ。すぐかえるからな」

SE：ざわめき(防災訓練の様子が分かるような)

役員さん「南2班の班長さん、各家庭の人員点呼をお願いします」

班長さん「佐野さんみなさんいますか？、渡辺さんのおじいちゃんは・・・」

(役員／班長の声はSEと一緒に聞こえて来るのに被さって)

近所の人「アラア、勝又さんちのおじいちゃんじゃない。久しぶりね。」

おじいちゃん「孫が訓練大事だって言うんで、ちよつくら見に来たって訳さあ」

近所の人「そうよねえ。避難なんてことになったら、ご近所パワーが大事なんだから、訓練しとかないとねえ。」

おじいちゃん「調子よくそうさやあ。あんた知ってるかい？富士山が前に爆発したのは300年くらい前で、そのときの火口が、宝永山なんだよ。富士山のおなかから爆発したんだってさ。富士山の頂上から噴火したのはずっとずっと前で、噴火のたびに火口の位置は変わっているって言うんだから…」

さやか「宝永山って、噴火したんだね！おじいちゃん詳しいね！」

近所の人「あらやだ、富士山のとっぺんから噴火するのかわかってたわ。じゃあ次はどこから噴火するのかしら…」

おじいちゃん「ともかくだな、富士山は今もまだ活火山でいつ噴火してもおかしくないんだよ。」

役員「それでは皆さん、集まってください。富士山の噴火について、市役所の太田さんから話を聞きましょう。」

太田さん「今回は、富士山火山広域避難計画に基づいた訓練です。避難訓練を行う前に、避難するために必要な情報や、避難する場所、手段について説明します。」

近所の人「あとう、噴火警戒レベルが低くても、御嶽山は噴火したんですよね。噴火警戒レベルって当てにならないのですか？」

太田さん「まず、噴火警戒レベルは一から五まであって、富士山の噴火警戒レベルは、一で平常です。警戒レベル二と三が火口付近の警報で、警戒レベル四と五になると特別警報として避難をおすすめします。これら噴火警戒レベルも絶対的なものではなく、あくまで予想です。現在の観測網では、御嶽山のように、前兆現象をとらえられないという場合もあります。」

おじいちゃん「ちよつときいてもいいかい？富士山の場合、噴火の前に大きな地震もあるって聞いたけど、噴火と地震と津波が一度にやってくる可能性もあるのかい？そしたらやつぱ訓練は無駄じゃないか？」

太田さん「さまざまな、災害に対応するためには、自分たちが住んでいるところに、どのような災害が起こる可能性があるのかを理解し、命を守るためにどのような行動をとればいいのか、イメージする事が大切です。ましてや、地震

の後に、富士山が噴火するようなことになったら、外からの支援は難しくなる事が考えられます。そのためにも、地域で訓練を行う事が大切です。」

おじいちゃん「なるほど、確かに、隣近所で助け合わないと、どうにもならんやあらあ。」

おかあさん「おじいちゃん、近所のこと詳しいでしょ、どこに誰が住んでいるかわかっているじゃない。そうしたら、おじいちゃんがまず、近所の人に避難を呼びかける事ができるかもしれないでしょ？」

おじいちゃん「そうさなあ。そうは言っても俺もまだ死にたかあないしなあ。それによお、俺は一番こいらのこと詳しいからなあ。訓練に参加すれば、もつといろいろな人助けもできるって訳なんだなあ。富士山の噴火はどうする事もできねえけど、助かる命を、諦め無い事が大事だって、分かったよ。」

さやか「さすが私のおじいちゃん。富士山の歴史だけじゃなくって、近所のこととも、何でもわかるんだね、博士だ！博士だ！」

近所の人「勝又さんがいれば本当に安心していられるわあ。」

おじいちゃん「おおまかせときな、次の訓練はいつだい、町内の人全員参加になるように声かけて回るか。」

お母さん「防災訓練は半年後ですよ。」

おじいちゃん「あと半年しかないのかい、すぐチラシ作らなきゃなあ。」

おとうさん「俺もおじいちゃんを見習って、もつと近所のことを知っておくように、運動会や文化祭も参加するようにしないとな」

おかあさん「いいと思うわ。私も時間を作るようにするね。ご近所同士、仲良くもなれるし、不審者も見分けられるようになるものね」

さやか「私も、この街大好きだし、友達誘って、もつとこの街のこと、勉強してみたい！」

モノローグ

(落ち着いて)

「近所のみんなと仲良くすることが、防災につながって、富士山の噴火でも助け合えるなんて、ほんとすごい。

それに家族一丸になるってことは、おじいちゃんからおとうさん、

そして私に、家族とこの街の歴史が受け継がれていくってことなんだ。

きれいな富士山と恐ろしい富士山。両方の富士山を

私たちは、ちゃんと知っておかないとね。」